

北海道立文学館

特別展 戦後北海道の演劇

11月2日（金）～12月16日（日）

森 一生

Ⅰ 特別展 戦後北海道の演劇

戦前から篠路歌舞伎、外国語劇など個性的な活動が注目されていた北海道の演劇だが、その本格的な始動は、戦後になってからだと言われる。地域に根ざした地道な演劇活動は、数多くの優れた作品、公演を創り出してきた。

その（第二次世界大戦）戦後から今日までの道内演劇事情を紹介しようとするのが、本展示会の目的の一つである。さらに、その場、その瞬間を重視する時間芸術である演劇は、もともとその芸術性を記録として残すことは非常に困難なことであるが、わずか20年・30年前の出来事が既に歴史や伝説になっていくことを考えると、このままでは、重要な資料が散逸してしまうこと、いま収集し、整理し、保管して後世に伝えていくことも本展示会の大きな目的の一つである。

北海道の演劇史を研究する演出家・鈴木喜三夫氏は、2004年に「北海道演劇 1945～2000」（北海道新聞社）を出版した。その資料を基本にし、主に一

般演劇について監修。北翔大学北方圏学術情報センター共同研究プロジェクト舞台芸術研究グループ研究員・森一生が、62年の歴史を持つ北海道の高校演劇を中心に、最近の中学校・大学の演劇事情などを監修。さらに、「小劇場活動」「演劇祭」など2000年以降の北海道演劇に重要な役割を果たしてきた事象を加味し、解説したユニークな展示会となった。

展示コーナーは、次のように年代順に区分けし、その特徴的事項をまとめる形とした。



戦後北海道の演劇 オープニング

1 明治・大正・昭和戦前期の北海道演劇

篠路歌舞伎、外国語劇

フランス語劇『青い鳥』に出演する伊藤整・小林多喜二などの写真・パネルなど。

2 1945年～50年

戦後すぐの北海道演劇

自由劇場・札幌、自由座・函館、帯広演劇研究会《後に新人座》、人生座、北海劇場・旭川、留萌朗研、北大演劇研究会『どん底』などの舞台写真、パネル、パンフレットなど。

3 1950年代

北海道の高校演劇62年間の足跡をたどる

草創期1回大会から5回大会までの特徴、6回大会以降の特徴、創作劇と創作劇集、合同公演と『火山灰地』、全国大会での実績、最近の動向などのパネル、舞台写真、本山節彌『OS』の原稿、『移民』『聖者の行進』脚本、久保栄『火山灰地』の原稿など。

4 1960年代

北海道演劇集団の結成―その役割とあゆみ―

HBC放送劇団出身者とともに立ち上げ、本道の創作劇のさきがけとなった『青の会』『オホーツクの女の舞台写真。新芸、うみねこ(小樽)、波(岩内)、はこだて、湖(三笠)、やまなみ(旭川)、海鳴り(紋別)、扉(帯広)、北芸、どらまぐるうぷ(釧路)、寒流(札幌)』など現在も活動している劇団の紹介、公演パンフレッ

ト、舞台写真など。

北海道人形劇フェスティバル―人形劇活動の展開と歩み―

第25回・25周年記念北海道人形劇フェスティバル(札幌市)ハンガリー人形劇場アテラ公演の舞台写真、第40回人形劇フェスティバル旭川会場『夢テント』の舞台写真、第50回人形劇フェスティバル神楽市民交流センターの写真、第53回北海道人形フェスティバル『マリオネットを操ってみよう』の舞台写真など。

5 1970年代

北海道における演劇鑑賞運動のあゆみ

1970年4月に函館、6月に札幌・室蘭・釧路に鑑賞団体「労演」が発足したが、それ以降のあゆみ。札幌演劇鑑賞会機関紙「どんちよう」、旭川市民劇場15周年記念 河『1982・嫉妬』の舞台写真など。

北海道の子ども劇場―子どもたちの健やかな成長をめざして―

劇団ブーク公演『エルマーの冒険』の舞台写真、劇団風の子公演『宝のつるはし』の舞台写真、1977年ルーミアからの公演作品『バカラの冒険』の舞台写真、北海道こども舞台祭典交際シンポジウムの写真など。

6 1980年代

小劇場の周辺

駅裏8号倉庫、札幌本多小劇場(マリアテアトロ)、

子どもの劇場やまびこ座など、70年代に萌芽した北海道の演劇は、小劇場公演で本来の「創造空間」としての活況を呈していく。極、アレフ、魴^{ウナギ}鱒^{マス}舎、白戦、P・プロジェクト、オーパーツ、芝居のべんと箱、53荘、貫索舎（札幌）、自由飛行館（函館）、室蘭演劇工房（室蘭）、北芸（釧路）—などのパネル、舞台写真、パンフレットなど。

プロデュース公演、住民参加劇

札幌市教育文化会館「雪祭り芸術劇場」、岩内市民劇場・町民参加劇『飢餓海峡』—など新しい流れとしての住民参加・プロデュース公演についてのパネル、舞台写真、パンフレットなど。

専門（プロ）劇団

劇団さつぽろ・北海道風の子・TPS（シアター・プロジェクト・さつぽろ）富良野塾などの動向について。

“舞台の上に風を吹かせる” 中学校演劇

校内発表に限られていた中学校演劇が、中文連の「演劇専門委員会」として組織化。地区発表大会。さらに地域での「合同公演」そして、全道発表大会—と最近の活動は目覚ましいものがある。その足跡を10周年記念公演『何処かで誰かが』1996年、20周年記念公演『からすたろう』2006年、25周年記念合同公演『はるにれと少年』2011年、群読『舞台の上に風が吹く』—などの舞台写真、大会パンフレットなど。

7 1990年代

道東小劇場ネットワーク

1998年釧路で、道内外の小劇場活動に興味を持つ劇団・演劇人が集い、「シンポジウム+舞踏・波止場に集う小劇場空間の住人たち」が開催された。その経緯、さらに、「道東小劇場演劇祭」に発展し、11年間演劇祭は継続するが、それらの舞台写真、パンフレットなど。

北海道文化財団と演劇のかかわり

1994年「北海道文化振興指針」を受け、財団が設立されるが、「地域を育てる（市民劇などの活性化）」「観客を育てる（鑑賞機会の提供）」「演劇人を育てる（北海道舞台塾）」の活動概要の舞台写真など。

TPSから札幌座へ

1996年、TPSを運営する北海道演劇財団が設置されたが、その設立の経緯、現在までの動向、そして劇団TPSから、札幌座への活動のあらましを舞台写真で紹介。

21世紀初頭の小劇場演劇

21世紀初頭、活発な活動を展開する、チームナックス、WATER33—39、ハムプロジェクト、劇団千年王国、劇団イナダ組、Theater・ラグ・203等々の舞台写真など。

8 2000年代〜現在

学校演劇の動向—大学の演劇活動を中心に—

戦後、道央圏だけでも北大、小樽商大、道教育大、北海道、道東海大、天使女子大、光塩短大などで目覚しい活動があったが、それは、サークル課外の活動であった。教育課程のなかに「舞台」表現芸術（札幌国際大）、「舞台芸術系」「舞台芸術コース」（北翔短大・北翔大）「芸術課程・芸術文化コース・芸術教育専攻」（道教育大岩見沢校）の活動状況など。『イゼルギリ婆さん』ロシア公演（札幌国際大）の舞台写真、『三人姉妹』『西の人氣男』『真夏の夜の夢』の舞台写真（北翔大）など。

札幌劇場祭のあゆみ
2005年に始まったシアター・ゴー・ラウンド（TGR）札幌劇場祭のあらましについて、パネル、舞台写真など。

札幌演劇シーズンの試み
札幌演劇シーズンとは何か、その概要、演劇創造都市札幌プロジェクトが提言することについてのパネル、舞台写真など。

以上、8コーナーにわけ、展示物約500点の展示であった。期間中の展示会場

道内演劇の戦後回顧

入場者は、1, 188名であった。
北海道新聞(2012年11月6日夕刊)で飯塚優子(札幌レッドベリースタジオ主宰者)氏は、
「本展がいま開催される大きな意義は、生身の当事者から直接、歴史が受け渡されることにある。わずか20年(30年前)の出来事が、すでに歴史や伝説になっていることを知って愕然とする私たち団塊世代にとっても、この機会は貴重である。」

第2次世界大戦から今日までの道内演劇事情を紹介する「戦後北海道の演劇」展が、札幌・北海道立文学館特別展示室で開かれている。札幌の演出家・鈴木喜三さんが2004年に出版した「北海道演劇 1945-2000」(北海道新聞社)をもとに、高校演劇や小劇場活動など、道内演劇に重要な役割を果たしてきた事象を解説したユニークな展示となっている。

展示物は約500。北海道の演劇史を研究する鈴木さん、民にとって大きな魅力だったと札幌の劇作家・森一生さんが監修した。
まず目につくのは、終戦直後の演劇史を研究する鈴木さん、民にとって大きな魅力だったと札幌の劇作家・森一生さんが監修した。

まず目につくのは、終戦直後の演劇史を研究する鈴木さん、民にとって大きな魅力だったと札幌の劇作家・森一生さんが監修した。
道内演劇の発展に大きく貢献したのには、高校演劇という。51年11月には、道内各地から16校が参加して第1回全道大会が札幌・ススキノにあった。「オホソックのわらさじ」(48年)などの舞台写真

など、道内勢が全国の頂点に立った計8回の成績なども紹介。70年代からは学校の垣根を越えた合同公演も盛んになり、象徴的な上演作として、札幌出身の劇作家・久保栄が37年に書いた「火山灰地」の直筆原稿も展示されている。このほか、70年代以降に各地で増えてきた小劇場や演劇鑑賞運動、59年設立の「さっぽろ」をはじめとするプロ劇団の活動、今年から始まった「札幌演劇シーズン」など新しい動きも紹介。鈴木さんは「年代ごとの特徴がよく現れ、現代につながる北海道演劇の大きな流れを知ってもらえる」と思うと話している。

北海道新聞 2012年11月6日(夕刊)

この展覧会が北海道文学館の特別展として開催されることにも注目したい。演劇は文学の根源に関わる表現である。演劇の公的研究機関がない現状で、文学館が演劇をフォローすることに大きな意義がある。」と述べている。

II 特別展 戦後北海道の演劇 関連事業

1 記念講演会 「北海道演劇と私」

講師・本山節彌氏（劇作家・演出家）。

11月3日（土） 14時～北海道立文学館・講堂。参加者58名。

「私は雪とほとんど無縁に育ってきた。朝鮮京城（大韓民国・ソウル市）、東京青山（敗戦引揚げ）、佐賀、熊本、伊豆御蔵島。まれに降ってもべちゃ雪ですぐに解けてしまう。1950年2月、私は北大を受験すべく北上した。特急も急行もなかったから普通列車だ。東北本線、青函連絡船、函館本線。とことこ走ると大沼公園あたりで視界が拡がる。左右に小沼、大沼、何もかも全部が白銀の世界。凄え凄え、これが北海道だ。長万部も倶知安も小樽も、札幌に着くまで白銀世界が続く。それまでは受かっても落ちてもどっちでもいいやと思っていた北大に、急に入りたくなくなったのがその時だ。（略）

季節が変わっても北海道大好きが続く。大自然も人間も空気もみんな新鮮だった。内地と違う。植物もだ。（北大）理学部左横のはるにれの巨木群、農場のポプラ並木。講義をサボってよくだたずんだものだ。演劇と関わるのはもう少しあと。（略）

2年目から、札幌啓北商業高定時制の教師になった、

食うために。北大（旧制ラスト）卒業。昼が空いたので静修高（私立女子高）の化学の時間講師になる。隣席の女先生が演劇部の顧問、家庭があつて面倒を見切れない。演劇部員にコンクールに出させて欲しいと嘆願されて困っている。『俺でよかつたら』と横から発言、部員が喜んだのは言うまでもない。（公演での資料「好きこそ物の上手なれ」より）——。こうした語り口調で、全国高校演劇コンクールで最優秀賞『オホーツクのわらすつこ』の上演事情、反応や『閉山』（東京）、『鍛冶』（岐阜）、札幌開成に転勤してからの『イゼルギリ婆さん』、『ゴリキー原作私脚色（広島）』、『都会の森の物語』（千葉）、『大きな木』、『シェル・シルバスタイン私脚色（神戸）』、『水仙月の四日』、『宮沢賢治原作私脚色（宇都宮）』、『クイーン』（名古屋）——全国大会に出場したその経緯——について語った。

さらに、劇団「青の会」の創立の頃の話。最近作『はるにれと少年』創作の動機と同作品のDVD鑑賞などがあり、「大好きな北海道に根を下ろし、北海道を見つめてきたから（これらの作品は）書けたのだと思う。好きこそもの上手なれ。上手下手はともかく、好きだから書けたのだと、いまつくづく思う」と締めくくった。

2 演劇フォーラム

① 高校生による久保栄『火山灰地』

—石狩合同公演をふりかえる—

11月11日（日） 14時～北海道立文学館・講堂。

学校の垣根を取り払い、地域の高校生がみんな演劇を作り上げる。という合同公演は、北海道の高校演劇

の大きな特徴であった。その象徴的な作品が、第10回（1978年）の『火山灰地』第1部と、間に第11回の、ジロドウ作『間奏曲』を挟んで、第12回（1980年）の『火山灰地』第2部の上演である。

「久保栄という大劇作家が軍国主義の時代、反戦平和を心に秘めて書いた普及の名作である。東京のプロ劇団でも上演できないでいる（昭和12年・新協劇団、昭和61年・劇団民芸、最近平成17年・劇団民芸創立55周年記念公演）と3回だけであり、この高校生の公演を含めて4回だけである。この戯曲を生んだ北海道の大地で、次代を背負う高校生が束になって上演することに意義がある。（略）帯広、音更神社、池田にあった炭焼き窯芽室の農業試験場などを貸し切りバスで現地調査。（以下略）」（当日の資料「高校演劇『火山灰地』公演のころ」本山節彌 より）

当時、高校生であり（舞台装置制作を担当）、現在中学校の演劇指導者として活躍している山本康博氏や当時高校生として出演した人、演出助手、制作担当の人などが、「高校生の『火山灰地』を観て」久保吉春（『北方文芸』1978年12月号・久保栄特集）のプリントを読んだ、貴重な体験を振り返った。

② 「劇団TPS」から「札幌座」へ

——北海道演劇財団の新たな挑戦——
11月18日（日） 14時～ 北海道立文学館・講堂。

平田修二（北海道演劇財団専務理事）、マイエル・イングリッド（日本文学研究者・翻訳家）、加藤浩嗣（北海道新聞記者・シアターホリック ブログ主宰）の3人

による鼎談。

1996年に北海道演劇財団の付属劇団として発足した（劇団）「TPS」は、今年2012年、「札幌座」と改称した。16年の活動を振り返り、これまでの日本の劇団と全く異なる機構での、新たな活動に挑戦する——その取り組みを語る。

③ 「劇団新劇場」50年のあゆみ

11月25日（日） 14時～ 北海道立文学館・講堂。

1962年創立の「劇団新劇場」は道内で上演活動を継続する最も歴史あるアマチュア劇団である。50年にわたる劇団のあゆみとこれからの抱負を、劇団代表・斉藤誠治氏と演出・山根義昭氏とが語る。

④ 「北海道文学」の中の演劇

12月1日（土） 14時～ 北海道立文学館・講堂。

北海道大学名誉教授・北海道立文学館理事長・神谷忠孝氏と 劇作家・演出家・本山節彌氏とレッドベリースタジオ主宰・北海道立文学館評議員・飯塚優子氏の三人の鼎談。

神谷忠孝氏は、文学研究者の立場から、久保栄—16歳で小説を書き、その後、戯曲『火山灰地』や『林檎園日記』を書いた—と、有島武郎—処女作『老船長の幻覚』で出発、『ドモ又の死』など4本の戯曲を書き、その後『生まれ出づる悩み』や『カインの未裔』などの小説を書いた—の二人を例に上げて小説と戯曲について論及。さらに、早川三代治・久生十蘭の文学活動などを紹介し、北海道の文学にとって演劇はその根源に関わる表現である

ことを改めて提起した。

本山節彌氏は、自分の体験、特に外山卯三郎・久保栄らと直接、接したことを述べながら、文学と演劇の関係を提起した。

飯塚優子氏は、最近の若い文学者たち（例えば、佐々木譲ら）と演劇の関係について述べた。

①④のフォーラム参加者98名

3 「札幌劇場祭」 対談・公開審査

12月2日(日)

対談 佐々木譲（作家）、橋口幸絵（劇団千年王国主宰）。参加者62名。公開審査156名。

札幌市内9劇場で、11月から12月の1ヶ月に上演される約30本の演劇作品（90回を超える公演）を審査員数名が公開審査し、「賞」を決める。

4 記念演劇公演

①ひとり芝居『八重のものがたり』

（水上勉原作「飢餓海峡」より 演出・鈴木喜三夫

11月11日（日） 18時30分、

北海道文学館ロビー。観劇107名。



「札幌演劇祭」公開審査

2003年に「岩内市民劇場」で上演した住民参加劇を新たに脚色し、「八重のものがたり」三人の会が上演。

②『オホーツクのわらすっこ』

（本山節彌作 森 一生演出）

11月23日（金） 14時、18時、

北翔大学北方圏学術情報センター・ポルトホール。観劇175名。

出演・（神田静子）

大坪久美子、（酒井徳三）高島克明、他、北翔大学北方圏学術情報センターポルト共同研究プロジェクト舞台芸術研究グループ。

1966年、北海道から（札幌啓北商高定時制が）高校演劇全国大会に初参加し、最優秀賞を獲得した名作を45年ぶりに再演。



「オホーツクのわらすっこ」作者の本山節彌氏（左から二人目）演出の森一生（右端）

③朗読劇『老船長の幻覚』

（有島武郎作 森 一生演出）

12月9日（日） 19時、

北海道立文学館・講堂。観劇63名。

出演・(老船長) 菅村敬次郎、他、北翔大学北方圏
学術情報センター・ポルト共同研究プロジェクト舞台
芸術研究グループ。

2011年、有島武郎の処女作をニセコ有島記念
館で90年ぶりに上演したものを再演。

5 協賛公演

①こぐま座会場 (札幌市人形劇場こぐま座)

人形劇『しろきちおかのみ』

11月17日(土) 11時〜 14時 18日 11時〜

1977年、人形劇で初の札幌芸術大賞を受賞し
た作品を上演。

人形劇『だるまちゃんをとんぐちゃん』

12月8日(土) 11時〜 14時

1956年、札幌で初めて誕生したアマチュア人
形劇団による上演。

人形劇『のみこみとつつあ』『あらしのよるに』

12月9日(日) 11時〜 14時

「ひよっこ」の次世代、札幌若手のホープ「コケコッ
コ」による上演。

②シアターZOO会場 (扇谷記念劇場シアターZOO)

演劇『アイヴイッド・コパフィールド』

11月30日(金)〜12月5日(水)

2012年、衣替えした「札幌座」が、その機構

改革を生かした新作の上演。

6 ギャラリー・トーク

北海道立文学館・展示会場 (会期中の土曜日・日曜
日の11時より)

①「札幌演劇鑑賞会・北海道演劇財団・札幌劇場祭・
札幌演劇シーズンなどの演劇の軌跡」

講師：平田修二(北海道演劇財団専務理事)／「札
幌座」チーフプロデューサー、11月3日(土)。

②「劇団『風の子・北海道』の活動」

講師：中島茜(劇団風の子北海道)、11月4日(日)。

③「語り——創造の楽しみ(読み聞かせ実演)」

講師：舛井正博(芝居のべんと箱)、11月10日(土)。

④「札幌静修高校演劇部『山月記異聞』『花いちもんめ』
と私」

講師：森 一生(劇作家／演出家)、11月11日(日)。

⑤「北海道の子どもおやこ劇場のあゆみ」

講師：仁木邦治(北海道子どもおやこ劇場連絡会)、
11月17日(土)。

⑥「劇評ブログ・シアターホリック」

講師：加藤浩嗣(北海道新聞社記者)、11月18日(日)。

⑦ 「アイヌの人形劇づくりに関わって」
講師・遠州雅樹(劇作家/舞台監督)、11月24日(土)。

⑧ 「藻石高校演劇部『明日は天気』と私」
講師・菅村敬次郎(劇作家/演出家)、11月25日(日)。

⑨ 「アンネフランクと生きた50年」
講師・鈴木喜三天(演出家/座・れら代表)、12月1日(土)。

⑩ 「中学校演劇の30年」
講師・長濱高雄(札幌市中文連演劇専門委員会)、12月2日(日)。

⑪ 「高校演劇の舞台美術と私」
講師・高島克明(元道高文連演劇専門委員長)、12月8日(土)。

⑫ 「こどもの劇場—こぐま座、やまびこ座」
講師・岩崎義純(元こぐま座、やまびこ座館長)、12月9日(日)。

⑬ 「プロ劇団さっぽろの44年」
講師・今野史尚(俳優/元劇団さっぽろ)、12月15日(土)。

⑭ 「山田太一作『ラブ』に挑む」
講師・ラブの会(澤口謙・竹江維子・斉藤和子・舛井正博)、12月16日(日)。

このように会期中の毎土曜日・日曜日14回にわたり、北海道の演劇に大きく関わってきた人たちが、それぞれの立場から(本人が直接)語り、生身の当事者から直接、「歴史」が受け渡される貴重なトークとなった。ギャラリートーク参加者253名。

北海道演劇名鑑

特別展

戦後北海道の演劇

芝居づくりにかけた演劇人たちの熱いメッセージ

2012・11/2(金)~12/16(日)

中島公園内●北海道立文学館 特別展示室
〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-4 TEL.011-511-7655
URL: <http://www.h-bungaku.jp>

開館時間 ●9:30~17:00(入場は16:30まで) 休館日 ●毎週月曜日(11月5日を除く)、11月8日(木)
観覧料 ●一般400円(320)円、高大生200(150)円、中学生以下+65歳以上無料 ●17歳以下は3割引き

1 『戦後の第一—北海道演劇団創立30周年記念誌—』(1994年) 2 『北海道の人形劇—フェスティバル—50年史』(2011年) 3 『北海道演劇史(1973年)』
4 『北海道演劇史(1973年)』(2000年) 5 『北海道演劇史(1973年)』(1988年) 6 『戦後の演劇—演劇』(1979年)
7 『戦後の北海道演劇—北海道演劇史—』(2006年) 8 『北海道演劇史(1973年)』(1983年) 9 『札幌の演劇』(1983年) 10 『北海道演劇史(1996年)』

主催 ●北海道立文学館、公益財団法人北海道文化財団「戦後北海道の演劇—展示」実行委員会、北海道新聞社 監修 ●本展 三次(演出)・北海道演劇史(研究)、第一(制作)・演出)
後援 ●札幌市、札幌市教育委員会、協賛 ●札幌新聞社、札幌市青少年文化活動協議会、札幌市中文連演劇専門委員会、道高文連演劇部、道高小劇団ネットワーク、北海道大学、北海道演劇史(研究)協議会、北海道演劇史(研究)、北海道演劇史(研究)、北海道演劇史(研究)、北海道演劇史(研究)、北海道演劇史(研究)、北海道演劇史(研究)